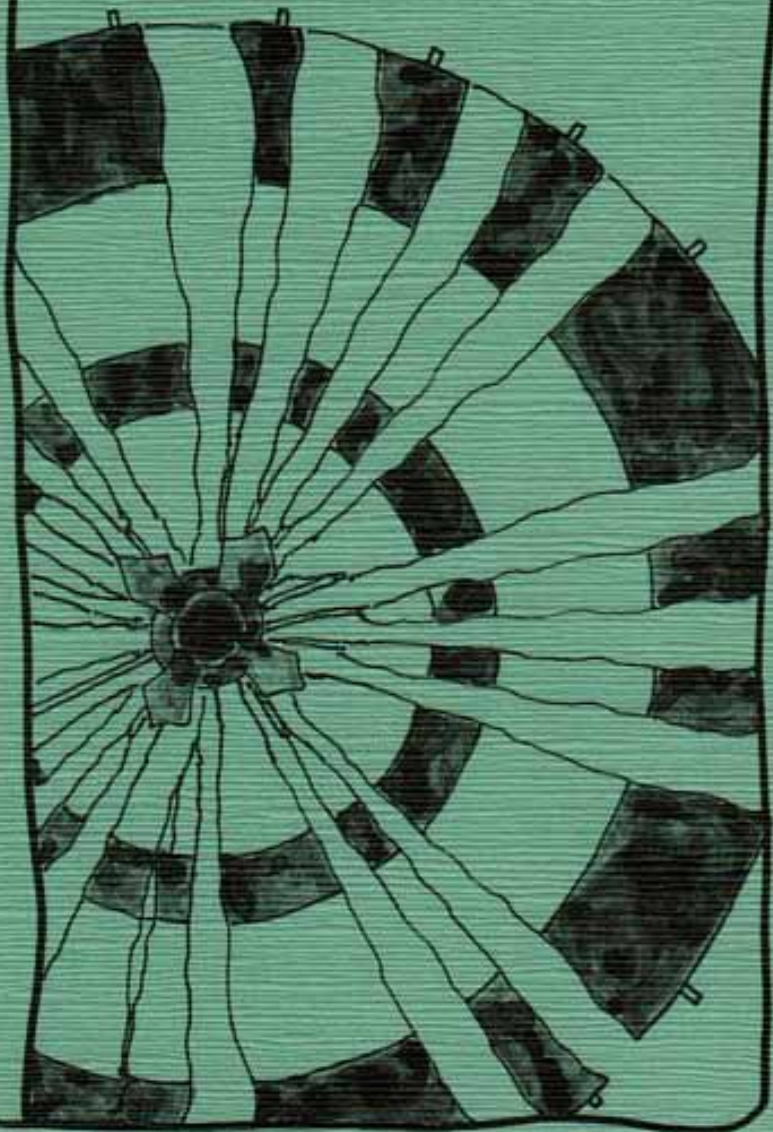


# やぶれ傘

一一八号

二〇二二年二月



探梅は鶉の連れ鳴き聞きながら 根橋宏次  
 初雪といはれながらに雪を見る きくちきみえ  
 冬の蜂人工芝に椅子ふたつ 大島英昭  
 暫くは窓開けて見る牡丹雪 廣瀬雅男  
 後ろからタンクローリー日短 丑久保 勲  
 どことなく癖のある鍵寒の星 青谷小枝  
 海鼠噛み阿部完市の句集読む 瀬島酒望  
 寒鯉が動く十日の月が出て 藤井美晴  
 薪割の薪飛んでいく花八つ手 白石正躬  
 枇杷の花にほひ雀の来てゐたる 天野美登里  
 焼売に醤油を垂らす年の暮 小山よる  
 やがて止むオルゴール聞く炬燵かな 安藤久美子  
 隅に水タンク置かれて冬菜畑 渡邊孝彦  
 冬銀河光の粒が落ちてきさう 有賀昌子  
 野良猫の目と出会ひたる霜の朝 秋山信行

## 抄 集 句 傘 大 崎 紀 夫 選

プレゼントもらふこどものサンタさん 松村光典  
 初明り厨より時動き出す 武藤節子  
 枯野から遠く高層ビルを見る 湯本正友  
 和菓子屋の暖簾柿色秋深し 浅嶋 肇  
 煮凝りの魚の眼玉を箸にとり 石原健二  
 湯豆腐のふるふ豆腐を掬ひとり 泉 一九  
 雪が降る昭和の歌のひと節を 岩藤礼子  
 跨線橋冬満月を横に見て 奥田温子  
 葉牡丹の置かれしところ良く掃かれ 木村瑞枝  
 自転車の大根の葉のゆさゆさと 小巻若菜  
 米一合炊く支度して今朝の冬 齋藤朋子  
 獄中にまだ中核派冬に入る 柴崎和男  
 茶の花や坂をのほれば旧駅舎 高橋 均  
 胸もとの赤子の温み冬に入る 竹内文夫  
 赤べこの首ふつてゐる春隣 貫井照子

あぢさひの鞠をくづさず枯れにけり  
武藤節子  
筆太に法話の知らせ石露の花  
下枝に日の届きをり十二月  
初明り厨より時動き出す  
頑張らない諦めないと初日記  
思ひ出は老の宝よ冬日向  
尼僧らの足首細し牡丹の芽

村田武

冬晴れや手紙書き終へポストまで  
冬空へごみ処理場の煙立つ  
捨てられし後も咲きをり冬の菊  
町会の倉庫の横の水仙花  
お隣の庭の蠟梅咲きにけり  
枝道の行き止まりには寒椿  
春隣色とりどりの幼稚園

森美佐子

冬うららセルフ給油に戸惑つて  
日差し満つ落葉振り撒きあそぶ子ら  
母の作りし掻か巻まの重さかな  
底浅き用水をくる冬の鯉  
跨線橋から遙かなる初筑波  
密をさけ小さき社に初参り  
中洲より鷺が飛び立ち寒に入る

山本久枝

冬の蝶メタセコイヤの下を抜け  
石灯籠のすぐそばに実千両一  
下りる人なくてバス行く冬木の芽  
釣人に冬夕焼けのありつたけ  
子等のこゑはづむ公園梅ふむ  
やぶ椿雑木林のひとところ  
傘寿には傘寿の笑顔初鏡



バスを待つ茶の花の咲く垣の前  
 湯本正友  
 足元の岸に寄りくる鴨の水尾  
 葉が揺れて鳥かげ移る冬椿  
 見沼たんぼに乾びある冬の畑  
 日のあたる山の頂ひめつばき  
 足止めて冬芽ながめる見沼土手  
 枯野から遠く高層ビルを見る

湯本実

油揚げでひとり酌む酒神の留守  
 小春日の土手でマスクを外しけり  
 ハヤブサ2のカプセル帰還冬銀河  
 病院を出て薬局へ冬もみぢ  
 石露の花いまも空き家の庭に咲き  
 石垣の穴に生き物仏の座  
 暖簾出さぬ店ちらほらと冬時雨

二十日目の干し大根の皺深み  
 吉田幸恵  
 茶の花を眺めつつする夕支度  
 冬の朝古新聞の回収車  
 畑から戻りし夫に焚火の香  
 槽くべてスーぷつつつログハウス  
 読初はお隣りからの回覧板  
 祝膳五人家族に設へて

浅嶋肇

診察を待つ人無口秋深む  
 和菓子屋の暖簾柿色秋深し  
 池端に家鴨並んである小春  
 一瞬の黙のありけり大噓  
 夕星の見える隠れする枯木立  
 湯けむりのほんのり香る柚子湯かな  
 緩やかに稜線曳いて山眠る

安齋正蔵

水漬を袖で拭ひて急ぎけり  
義齒かなし太き人参噛み切れず  
白菜漬母を手伝ふ吾が右手  
買初の探し物するテナト店  
鉋の鏝研いで始める初仕事  
読初は孫と一緒始めアイウエオ  
あつあつのご飯に掛ける寒卵

石塚清文

木枯らしの中を灯油の販売車  
空堀に落葉残して風は去り  
よろず屋に炭団入荷の知らせ書き  
枯れ尾花茅葺屋根が丘の上  
枯れ菊のいまだに残る無人駅  
入れ立ての朝のコーヒーひたき来る  
北風強し母娘寄り添ひ小走りに

石原健二

枯野行く人の姿を後ろより  
中天の冬三日月は屋根に映え  
柿落葉踏めばざくりと足沈み  
雪吊りの縄のたるみがひゆうと鳴り  
煮凝りの魚の眼玉を箸にとり  
朝起きてあたりに探すちゃんちゃんこ  
冬帽を家の近くでそつととり

泉 一九

ストーブの鏝を落して焚き初め  
新巻を切身にせんと出刃を研ぐ  
建前の木の香新し茶が咲いて  
湯豆腐のふるふ豆腐を掬ひとり  
朴の木のを周りは朴の落葉だけ  
朱の椀に雑煮三葉のしやきとして  
けふ冬至片目で時計見る目覚め

苔庭は赤き落葉を散りばめて  
 鳩寄せて餌を撒くひと霜白し  
 シヤッター通りは何軒か松飾り  
 どの顔も初護摩の火に染まりて  
 トラツクの屋根に立ちぬる雪女郎  
 北にむかふ車のライト年越して  
 大屋根に鳩が一列初詣  
 稲田延子

花終帰る故郷のあるやうな  
 冬満月昔となりしコロナ前  
 こまごまと物頼まる十二月  
 着膨れて葛根湯を買ひに出る  
 この道を冬夕焼に染まるまで  
 まつすぐに冬夕焼に尽くる道  
 雪が降る昭和の歌のひと節を  
 岩藤礼子

酒すすみ会話の弾むおでん鍋  
 ベランダに鉢植糸並べ冬ぬくし  
 思ふまま綴つてみたく日記買ふ  
 初春や孫の背丈は母を越え  
 書初の丑の字の形整はず  
 冬の朝ひと席空けて発車待つ  
 春近し運動靴の紐を替へ  
 江口恵子

亡き父の好物なりし大根煮る  
 冬の夕喪中はがきの二枚着く  
 冬の陽背に足の爪切る昼下り  
 寒い朝マヌスク姿で目配せを  
 荒川の枯野に朝日差しきたる  
 北風に悴んである手でめくり  
 朝刊を悴んである手  
 枝みや子

奥田温子

姿見にうつる足元冬日ざし  
跨線橋冬満月を横に見て  
油揚げぜんまいと煮る日の短か  
糠床に埋め込む蕪の白さかな  
荷の型で分かる中身や歳暮来る  
若水を鳥の水場になみなみと  
鳥用に吊るすみかんに初日差し

神山市実

自転車の荷台に一葉柿落葉  
ママの着たべべ着てはしやぐ七五三  
水仙は工事現場の片隅に  
立冬の湯呑み茶碗は大き目に  
元旦の昼月高く残りをり  
味噌汁の具材雑煮の残り物  
人工芝踏めばガリガリ冬の朝

亀岡睦子

白菜を洗ふ姉さん被りかな  
日向へと塀越えて出る冬の蝶  
能楽を観ての帰りや年の暮  
初あかりまぶしいままでに窓の外  
ひさびさに甥の声聞く年初め  
なつかしき友より賀状横書きの  
冬菊を束ねて墓へ供へけり

木村瑞枝

茶の花の咲いてゐる日の午後  
冬帽に髪油の香残りゐて  
银杏散る本堂へゆく敷石に  
門口に塩盛る店の大熊手  
葉牡丹の置かれしところ良く掃かれ  
寒に入る硯の海に浮く光  
水仙を活けてひとり夜の夜となり

倉澤節子

舌先に葛湯のやけど今日も晴  
サーカスの小屋でつぺんの冬茜  
ぶらさがる刀豆の莢枯れ切つて  
冴ゆる夜をついと横切る白き猫  
菜園の葱の葉先のみな垂れて  
凍て星の下曲がりゆくモノレール  
けふひと日大根買ひに行つただけ

黒澤次郎

冬の鶴一羽残らず岸にあり  
蠟梅や思ひもよらぬ訃の手紙  
ゆるゆると落葉流るる野川かな  
初冬の水おだやかに流れゆく  
どこからか落葉降り来る商店街  
枯れ葦のあはひに見ゆる魚の影  
老いてなほ一人でいつも医者通

小池一司

迫り来るあの世を忘れ日向ぼこ  
雪の暮時へ帰る烏たち  
遙かなる山に日が射し街は雪  
家の周ぐるりを掻かれたる雪囲み  
牡蠣鍋の牡蠣を数へて入れてをり  
賀状書く顔の朧なひともあり  
左義長のけむり神社に上がりをり

小巻若菜

自転車の大根の葉のゆさゆさと  
山なみは西から北へ冬夕焼  
油断して落ち葉の中に倒れ込み  
あつ地震冬林檎むく手の止まり  
初日の出拝むま玄関前に出て  
日の差しして亡ま夫も交へて祝膳  
街の灯が遠くあざやか三が日

## ◇3月・4月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
3月	2日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	2日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	3日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	5日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	5日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	20日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	27日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	27日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
4月	2日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	2日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	5日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	6日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	6日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	17日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	18日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	さいたま市・見沼	丑久保 勲
	24日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	24日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

〔注〕ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

4月18日(日)の吟行。集合は10時。

集合場所はJR北浦和改札口前。

吟行地は見沼・市立病院の裏東側。

句会場は武蔵浦和コミセン・第1集会室。

◎連絡先

秋山信行 ☎048-874-0555	藤井美晴 ☎0422-55-2733
大島英昭 ☎048-592-5041	WEP編集室 ☎03-5368-1870
廣瀬雅男 ☎048-443-7522	丑久保 勲 ☎048-853-3856